コラム① “天邪鬼”、その正体は・・・

『やっぱりすごい！？佐伯区の「あまんじゃく伝説」』にいろいろな姿で登場する「天邪鬼」。その正体について探ってみました。

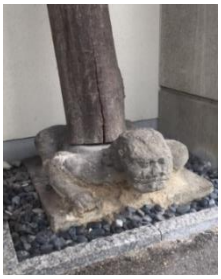
1　「天邪鬼」のことばには、次のとおり①～③の意味があるようです（付録を足すと４つ）。

意　　味	説明・例
①昔話に出てくる悪者。人に逆らい、人の邪魔をする。 	『第３章　鬼が主人公！日本各地のあまんじゃく昔話』で紹介した「橋杭岩の伝説」、「うりこ姫とあまのじゃく」に登場する天邪鬼が当てはまるでしょう。
②わざと人の言に逆らって、片意地を通す者 	『第１章　佐伯区に伝わる「あまんじゃく伝説」』に登場する子ども（道裕）や『第２章　子どもが主人公！日本各地のあまんじゃく昔話③広島・山口に伝わる“息子不孝”』に登場する息子が当てはまるでしょう。
③仁王や四天王の像が踏みつけている小鬼 月光山明星院	人間の煩悩の象徴として表されているようです。 例えば、広島市東区二葉の里にある月光山明星院の天邪鬼は仁王門の左右の柱の土台にいました(画像①②)。同じ境内にある毘沙門天の足の下にいるのも天邪鬼では？と推測しました(画像③)。また、同市東区牛田の日通寺では、天邪鬼が旧の柱部分とともに保存されています(画像④)。 尾道市の浄泉寺には用水桶を背負う天邪鬼がいるそうです。 皆さんのお近くの寺にも「天邪鬼」がいるかもしれません。 探してみるのも面白いでしょう。

画像①

画像②

画像③


画像④

【付録】こだま、山彦	秋田県、茨城県、群馬県、静岡県の一部地域では、「こだま、山彦」を自然現象ではなく、山谷に人以外の者（＝天邪鬼）がいて、それが人の声をまねしていると考えられていたとのことです。

（※1　参考文献･･･広辞苑第５版、世界大百科事典第２版、日本昔事典）

広辞苑では、原則として、語源に近いものから列記しますので、元々は①の意味であったものが②の意味に転じていった、あるいは③として造形されたものと想像します。

しかし、「仏法に屈伏する悪鬼の存在が天邪鬼のイメージ形成に影響を与えていると言われる」（日本ミステリアス妖怪・怪奇・妖人事典）と、逆の説もあるようです。

2　それでは、元々の語源と考えられる「昔話に出てくる悪者。人に逆らい、人の邪魔をする」という、天邪鬼の特徴をもう少し探ってみましょう。

「天邪鬼は神や人に反抗して意地が悪く，さらに人の心中を探り，その姿や口真似を得意とするところに特徴があり，最後には滅ぼされるという悪者の典型を示す。主人公である神の正しさと勝利をよりきわだたせる脇役として設定され，結果的には善と悪二つを対照させる効果をあげている。」
（世界大百科事典 第２版「天邪鬼」より）

「あまのじゃくについては、神や偉人が世に幸せをもたらそうとした企てを欺いて妨げたという伝承がいくつか見受けられる。昔すべての穀物は根元から実がいっぱいについていたのを、あまのじゃくがそれでは人間によすぎると手でしごいた、雑草の種を播いた、一年中しのぎやすい気候だったのを夏冬をつくった、橋や池の完成を妨げたという。（中略）こうした伝承に共通するあまのじゃくの性格は、意地が悪く常に神に逆らうが敵対するほどの力はなく、いつも敗れ、憎らしさの反面おかし味も備えているといえよう。神の正しさと最後の勝利をひきたたせるための存在と考えられ（後略）」
（日本昔話事典より）

この２つの事典（下線部）から、あまのじゃくの特徴を５つ挙げることができそうです。

ア	神や人に反抗して意地が悪い
イ	相手の心中を察することができる
ウ	姿や口真似を得意とする
エ	最後には滅ぼされる。脇役
オ	憎らしい反面、おかし味がある

改めて柱の土台になっている天邪鬼を眺めると、エ、オの特徴に通じる所があると思いませんか。

ただ、穀物の実り方や雑草の誕生、さらには夏の暑さや冬の寒さまでも、あまのじゃくのせいとするのは、さすがにかわいそうに思います。

3　天邪鬼の呼び名は、「あまのじゃく」、「あまんじゃく」の外、「あまのざこ」、「あまのじゃこ」、「あまのじゃき」、「あまのざく」、「あまんしゃぐめ」、「あまのさぐめ」‥‥たくさんあるようです(広辞苑第５版、日本昔話事典、鬼の大事典より)。

これらの呼び名は、元々は「古事記」、「日本書紀」に記された日本神話の登場人物「アマノサグメ（天探女・天佐具売)」に由来するという説があります。その神話の内容を紹介したものを掲載します。

「邪心多きアマノサグメは他人の心を探り出すのに長じた女神と伝えられた。古事記によると、出雲平定に赴いた天稚彦（アメノワカヒコ。(注)天者日子とも書く。）は、大国主（オオクニヌシノミコト）の娘・下照媛（シモテルヒメ）を妻とし、出雲の国を王権に帰服させる任務の遂行を怠った。王権はさらに鳴女（ナキメ）を使者として、天稚彦のもとに差し向けた。鳴女（ナキメ）は雉に姿を変え、キジが鳴くように王権の意向を伝えたが、天稚彦（アメノワカヒコ）の傍らに侍るサグメ（(注）アマノサグメのこと。）は、このキジは鳴き声が悪い。射殺してしまえと天稚彦（アメノワカヒコ）をそそのかしたために鳴女（ナキメ）のキジは殺されてしまう。『キジも鳴かずば撃たれまい』のことわざはこれに発する」
（「鬼の大事典」より）

サグメは、雉の鳴き声から王権の意向を察し、そのサグメの指示に従って、雉を矢で射殺した天稚彦は、結局、天上から戻ってきた矢に当たって死んでしまいます。

「相手の心中を察する」、「最後には滅ぼされてしまう」という点で、あまのじゃくの特徴と重なるところがありますね。

他の説として、「雨蛙をアマンギャク、アマガクと呼ぶ地方があり、あまのじゃくと語音が近く、注目される」と記しているものもあります（日本昔話事典)。

4　以上、いろいろと調べましたが、天邪鬼は、相手の心中を察し、まねをすることが得意のひねくれ者、しかし、力が弱いために、結局、善良な者、正しい者には負けてしまう、引き立て役といえるでしょう。

　ただ、日影があって日向の明るさがはっきりとわかるように、冬の寒さがあって春の暖かさが身に沁むように、天邪鬼の存在やキャラクターは、昔話や物語の中で欠くことのできない、重要な役どころと思います。

　「天邪鬼は『アンパンマン』に登場する『ばいきんまん』に似ていない？」と職員がふと感想を漏らしていました。別の者に化け、意地悪をし、最後には“アンパンチ”でふっとばされてしまいますが、その姿、声、行動はかわいくておかし味があり、確かに天邪鬼と重なるところが多くあります。

　昔話やアニメだけでなく、私たちの社会の中にも、過去の歴史や現代においても、いろいろな所で「天邪鬼」は登場していそうです。そう考えると、なかなか面白いと思いませんか。